

安西冬衛全集

第五卷

安西冬衛全集

第五卷

宝文館出版

安西冬衛全集 第五卷

昭和五十三年十二月三十日 第一刷發行

著 者 安 西 冬 衛

編 者 山 田 野 理 夫

發行者 羽 生 和 男

發行所 寶文館出版株式會社

東京都千代田區神田神保町三ノ一七
郵便番號一〇一
振替東京五一二八〇
電話〇三(二六二)四四〇九

印刷所 中臺整版
製本所 大光堂

©1978 Misaho Anzai

Printed in Japan

0393-001172-7715

目次

小説

河……………16

寒山拾得……………48

夏立ちぬ……………58

エッセイ

I 〈大正十四年—昭和十八年〉

冬……………156

一月十九日……………160

秋 〈編輯中記〉……………161

春の鱈……………161

北川冬彦	162
溝渠	163
佐伯の手紙	164

Ⅱ 昭和二十一年—二十五年

洞窟の讖書	174
現詩壇に寄す	175
青年と亀裂	176
ナンバにて	177
青春謝肉祭	178
天から落ちた靴	179
わが新春	180
近代の小妖精	180
喰積	181
わが初冬	182
王将のない将棋	182

詩とその周囲	166
春浪精神の再建(一)	168
参宮線にて	170

美貌について	184
間にあるもの	185
大阪弁ノート(一)	186
負数の子供	189
詩と絵	190
一九四八年のロー	190
杉山平一への手紙	191
異質の風俗	193
「韃靼海峡と蝶」界限	194
エスコート	196
三頭の馬のあるマニフェスト	198

「渴ける神」のサイドライト	198
以前の手紙	201
エロ出版の追放	204
立夏以後	205
リリプットの紐	207
夢	208
外貌の美しさについて	208
風俗手帖	210
方法と提出	211
太宰の義	212
(スクーター)	213
(スクーター)	213
女らしさの中に	214
五十一才の追撃	215
メイドンネ・ナフト	219
会話のエスプリを鍛へるために	221
悪しきものには抵抗ふな	225
なぜロシヤタバコの吸口は	225

あんなに長いのか	227
詩人小白書	230
黒インキのハガキ	232
変らぬすがた	232
秋の百選会から	233
風俗の周囲(上)(下)	234
女の美しさについて	236
薔薇の木の下で	238
秋の手紙	239
東京人物採集(一)	240
東京人物採集(二)	241
東京人物採集(三)	242
東京人物採集(四)	242
東京人物採集(五)	243
タンポポのポロネーズ	244
タンポポのポロネーズ(一)	245
ポロネーズ(二)補遺	247
タンポポのポロネーズ(三)	247

東京採集

風俗のほとり	249
ブランドン先生のこと	250
長門美保と東郷青児	250
観光の角度	251
姫路の小印象	253
死語発掘人のデスク	253
半人半馬の詩人達(上)	254
(ストロボ)	256
東京の女・大阪の女	257
風土と人について	258
高野初冬	260
聖ザヴィエルの投影	261
キャンドル・ウッド	262
夏の旅より	263
初冬のほとりで	264
アクセント	265
きもの	266

復古と異形	267
極端は美ではない	269
アンディ	270
真夏の夜の夢	271
百合となる道	273
価値改価の春	273
桜の記憶	274
アトランタの後姿	275
アーム・イン・アーム	276
「ベニヤ文化」の洋装	277
乳母車	278
精神のとりで	279
古代への半日旅行	280
現代悪の証言	282
コント1・9・5・0	283
晶子をしのぶタへの誘い	284
予言者郷土を容れず	285
小便小僧	287

Ⅲ 〈昭和二十六年—三十年〉

詩人試論	296
青衣女人	298
春のフロントグラス	299
風俗好戦	300
風俗は批評	301
新らしきアゴラ	303
城	303
花森安治論	304
女学生と詩	305
句碑の落葉	306
初春のころ	307
きさらぎ	307
箱根山のカーテン	308
鉄砲を恐れる根性	308
美への序曲?	310

翅ある頭	311
春の磯で	311
美しき堺	313
藍と白と赤	314
街の詩人は語る	314
婦人帽のある風俗	316
開国百一年	317
腰をすえて	318
鹹い海と淡い水の際に	318
海の回廊で	322
現代詩への誘い(上)(下)	323
池田克己の顔	326
ナポレオン・蝙蝠傘	327
私の好きなお店	328
伊勢海老	328

海のセラシイ	329
文学への意欲	331
春の支度	332
海が私をよんでる	333
大会にそそぐ永遠の情熱	334
哺乳	336
味の愁	337
桜と富士と	340
本の発見	341
春服	342
申年生れの六番目の子	343

Ⅳ へ昭和三十一年—三十五年へ

三十一年	360
ある小さな漁村	361
マリイ・ロオランサン縁起	362

ヌードの美しさ	344
ヌードのモラル	346
運命の赤い星	348
某月某日	349
怪談	349
夏の夜はなし	351
息づまる死闘一瞬	352
ケリー・グラントから	354
愛情こそ社会をよりよくする資産	355
桜んぼう	355
私の新婚白書	356

よび還す青春像	363
性の季節風	365
私の本	366

赤い炉火に寄せるわがねがい	367
テレビの美	368
一期一会	370
わが牛タ・セクスアリス	371
ボナバルティスムへの発展	372
草上の饗宴	375
春浪の冒険小説	378
カリブソ娘考	379
甲子園と私	380
空想の翼にまたがって	381
大阪	383
夜と昼の女性	385
「食後の唄」界限	386
初心者への言葉	387
茶番	388
いろはかるた	390
松風	391
文明かるた	392

朝宗	393
茫々四十年	394
選挙にもの申す	396
アタル	397
風俗将門眼	399
六月の小さい旅から	401
「亜」のデータ	403
一粒の塩	404
大阪善哉	404
エチケツトについて	408
私の青写真	409
新年の海	410
初富士	411
自由と統御	412
すぐろく	413
いんぎんぶれい	414
テレビと即物性	415
拍手の中から	417

秋風吹く水族館	454
「軍艦茉莉」書志	455
開かれざるこうもりガサ	457
暴力はほかにもある	458
お仕立券付きYシャツ	459
私の周辺	461
新しい記号	462
ホテルのロビーで	463
沿線処々春	465
春のラインアップ	467
一等国の春	469
臨海工業地帯	469
ナイターの灯	470
鄙うた愛し	471
なぜハンガリア人は	
二重の十字架をもつか	473
お正月覗き眼鏡	474
詩のモチーフ	475

王者の快楽	477
ジョン・ミハイリディスの餡パン	478
海外旅行について	479
考え方の革命	480
テレビ人文地理走査線	482
北九州と私	483
男からみれば	484
今昔	485
大阪の生理	486
旅と女	488
考える人	491
近ごろ	492
若戸大橋に立つて大連をしのぶ	492
人はもの思う輩である	494
三木露風を悼む	496
河井醉茗先生	498
河井醉茗先生のこと	499
冬の遠足	500

窓

トレンチコートの姿勢	503
叔父にもらった書付け	504
世界早回り選手	505
私は市電ファン	506
名づけ親	507
せんべいと洋書	508
万葉乙女にあう	509
朱い糸	510
ライスカレー物議	511
女の弁疏	512
お米政治の悪	513
関所の今昔	514

異説「貫禄負け」	515
匿名の旅人	516
明治の亡霊	517
蝙蝠傘のある風俗	518
各停天国	519
月世界旅行	520
夏を惜しむ	521
大安吉日明け	522
むかしの家	523
北海道日記抄	524
大連の残暑きつい日	525
ホテル談義	526
竹の秋	527
旅の女	528

後

記

..... 530

装釘 濱田 濱雄

小說

